# 勝海舟

【1823年〜1899年】

江戸本所の生まれ。無役の幕臣・小普請組、勝小吉の長男。直心影流免許皆伝。

ペリー来航時、老中安部正弘が募集した海防意見書に応募し、これが評価されて長崎海軍伝習所の一期生となり、五年間長崎で過ごす。一八六〇年に遣米使節団メンバーとして咸臨丸で渡航し、帰国後は軍艦奉行に就任。一八六二年に坂本龍馬を門下に入れ、神戸海軍操練所開設の準備を進めるも免職。

幕臣でありながら身分役職にこだわらない付き合いに徹し、幕府と長州の調停や江戸城の無血開城への尽力は大きい。

# ジョン万次郎

【1827年〜1898年】

土佐国幡多郡（現・土佐清水市中浜）の生まれ。漁師の次男。十四歳のとき遭難し、143日後にアメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号に救助される。同船のホイットフィールド船長に気に入られ、渡米後は航海術、造船技術などを学ぶ。その後再び捕鯨船に乗り、世界の海を回る。

漂流から十年後に帰国し、ペリー艦隊の来航後は幕府直参旗本に取り立てられ一八六〇年には通訳として咸臨丸に乗り太平洋横断。維新後は欧州視察団にも加わるが、政治家よりも教育者としての道を歩んだ。

# 坂本龍馬

【1835年〜1867年】

高知城下本丁筋生まれ。郷士坂本家の次男。

十九歳で江戸の千葉定吉道場に入門するが、間もなくペリーの黒船来航に遭遇。品川で沿岸警備に加わる。帰国後、ジョン万次郎の取調べをした河田小龍を訪ねてアメリカ事情を聞き、自分の船を持つことを誓う。

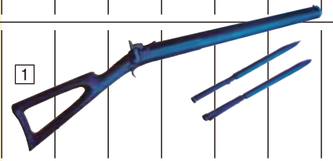
その後、再度の江戸剣術修行をへて土佐勤王党に入り、二十八歳で脱藩。勝海舟に出会い勝の私塾「勝塾」の塾頭となるも、海舟は失脚し薩摩へと預けられる。

その後は薩摩の後ろ盾を得ながら亀山社中の創設、薩長同盟の成立に奔走し、大政奉還に向けて船中八策を提案して新しい日本のビジョンを示した。

武力討幕を望まず、平和的革命を起こそうとした。志半ばに倒れたが、その遺志は多くの人に受け継がれている。

## 年表

| 年 | 出来事 | 勝海舟 | ジョン万次郎 | 坂本龍馬 |
|---|---|---|---|---|
| 1823 文政六年 | | 江戸本所亀沢町（東京都墨田区両国）に生まれる | | |
| 1824 文政七年 | | | | |
| 1825 文政八年 | 異国船打払令 | | | |
| 1826 文政九年 | | | | |
| 1827 文政十年 | | | | |
| 1828 文政十一年 | シーボルト事件 | | | |
| 1829 文政十二年 | | 将軍徳川家慶の五男慶昌の学友となる | | |
| 1830 天保元年 | | | | |
| 1831 天保二年 | | | | |
| 1832 天保三年 | 大塩平八郎の乱 | 家督相続 | | |
| 1833 天保四年 | | | | |
| 1834 天保五年 | 蛮社の獄 | 剣術と座禅の修業を始める | | |
| 1835 天保六年 | アヘン戦争 | | 出漁中に漂流し、鳥島に漂着。143日後に捕鯨船ジョン・ハウランド号に救助される | 高知城下・本丁筋（現・高知市上町1丁目）に生まれる |
| 1836 天保七年 | 天保の改革 | | | |
| 1837 天保八年 | 天保の薪水給与令 | | アメリカに帰港、オックスフォード学校で学ぶ | |
| 1838 天保九年 | | | | |
| 1839 天保十年 | オランダが開国を勧告 | 剣術免許皆伝 | バートレッド・アカデミーで学ぶ | |
| 1840 天保十一年 | 海防掛設置 | 結婚。蘭学を修める | | |
| 1841 天保十二年 | | | 捕鯨航海に出航 | 楠山塾入門、退塾 |
| 1842 天保十三年 | | | 日本近海でも捕鯨 | |
| 1843 天保十四年 | | 蘭和辞書『ヅーフハルマ』二部筆写 | | |
| 1844 弘化元年 | | | 一等航海士（副船長）になる | 日根野弁治道場で剣術修行 |
| 1845 弘化二年 | | 父・小吉死去 私塾を開く | アメリカに帰港 | |
| 1846 弘化三年 | | | 日本帰国の資金づくりのため金山で働く | |
| 1847 弘化四年 | | | 琉球に上陸し帰国 | |
| 1848 嘉永元年 | | 妹・順、佐久間象山と結婚。海舟と号す | 土佐に帰国。河田小龍が取調べ報告書『漂巽紀略』を書く。藩校教授館に出仕。土佐藩士に。 | 千葉道場入門 黒船来航で品川警護 佐久間象山に学ぶ |
| 1849 嘉永二年 | | 海防意見書を提出 | 幕府直参旗本となり中濱姓を名乗る。軍艦教授所教授に任命 | |
| 1850 嘉永三年 | | | | |
| 1851 嘉永四年 | | | 軍艦教授所教授に任命される | 江戸から帰国 河田小龍に会い、ジョン万次郎の情報を聞く |
| 1852 嘉永五年 | | | 英会話書を出版 | 再び江戸にて剣術修業 |
| 1853 嘉永六年 | ペリー来航 | | 咸臨丸に通訳として乗船 | 北辰一刀流長刀兵法目録を受け帰国 |
| 1854 嘉永七年 | 日米和親条約 | | 小笠原島の開拓調査に咸臨丸で行く | 徳弘孝蔵に西洋砲術を学ぶ |
| 1855 安政二年 | 長崎海軍伝習所設置 | | 壱番丸で捕鯨に出る | 土佐勤王党に加盟 |
| 1856 安政三年 | | 蛮書翻訳勤務を経て長崎海軍伝習所に赴任（〜二期） | 小笠原諸島で捕鯨 | 脱藩 勝海舟門下に |
| 1857 安政四年 | | | 薩摩・開成所教授に就任 | 勝海舟の尽力で脱藩罪赦免。勝塾塾頭に。藩命に背き再び脱藩 |
| 1858 安政五年 | 日米修好通商条約 安政の大獄 | | | 海舟と長崎へ。横井小楠を訪う。北海道開拓を計画するも頓挫 |
| 1859 安政六年 | | | | 長崎で亀山社中設立。薩長和解に尽力 |
| 1860 万延元年 | 遣米使節団アメリカへ。桜田門外の変 | | 咸臨丸で艦長として太平洋を横断する | 薩長同盟成立。寺田屋で襲われる。妻・お龍と薩摩へ新婚旅行。 |
| 1861 文久元年 | 土佐勤王党結成 | | | 長州征伐の海戦に長州軍として参加 |
| 1862 文久二年 | 吉田東洋暗殺 | 軍艦奉行並。龍馬ら九名が門下となる | | 脱藩罪赦免され海援隊長に。いろは丸衝突沈没。新政府綱領八策を作成 |
| 1863 文久三年 | 天誅組挙兵 八月十八日の政変 | 神戸海軍操練所設立に向け龍馬らと動く | | 11月15日暗殺される 享年三十三歳 |
| 1864 元治元年 | 池田屋事変 第一次長州征伐 | 軍艦奉行。外国の長州攻撃の調停に長崎へ。龍馬ら随行。神戸海軍操練所設置 | | |
| 1865 慶応元年 | 武市瑞山切腹 | 神戸海軍操練所廃止 免職 | | |
| 1866 慶応二年 | 薩長同盟 第二次長州征伐 | 再度軍艦奉行に。長州との休戦の密命を受け、会談し休戦協定を結ぶ | | |
| 1867 慶応三年 | 大政奉還 王政復古 | | | |
| 1868 慶応四年（明治元年） | 戊辰戦争 | 陸軍総裁。西郷と面談し江戸城無血開城 | | |
| 1869 明治二年 | | | | |
| 1870 明治三年 | 陸海軍設置 | | | |
| 1871 明治四年 | | | | |
| 1872 明治五年 | | 海軍大輔になる | | |
| 1894 明治二十七年 | 日清戦争 | | | |
| 1898 明治三十一年 | | 死去。享年七十七歳 | | 新政府より開成学校（現・東京大学）教授任命 |
| 1899 明治三十二年 | | | | 普仏戦争視察、発病 静養生活へ |
| | | | | ・・・・・ |
| | | | | 死去。享年七十二歳 |



1

2

3

4

5

6

7

8

1.捕鯨銃（小島一男氏所蔵）
2.咸臨丸難航図（木村家所蔵・横浜開港資料館保管）
3.勝海舟使用の椅子（名古屋市博物館所蔵）
4.『漂巽紀略』（高知県立歴史民俗資料館所蔵）
5.ジョン万次郎の陣笠（中濱京氏所蔵）
6-7.池道之助文書（池家所蔵）
8.龍馬書簡／文久3年3月20日